

Title	附属図書館時代の思い出
Author(s)	古原, 雅夫
Citation	静脩 (1999), 臨時増刊号(1999)100周年記念: 11-12
Issue Date	1999-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/37842">http://hdl.handle.net/2433/37842</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

## 附属図書館時代の思い出

古原雅夫

附属図書館書庫掛として法学部図書室から2階の閲覧事務室に席を得たのは、昭和33年である。始めて館内特に新書庫と旧書庫の案内をして下さった鈴鹿さんには、この時以来特に書誌学や古文書学のご指導を頂き、今もってその造詣の深さに敬意を払っているのは、私だけのことではないと思う。

貴重書庫を案内して頂いて『兵範記』その他の重要文化財があるのに驚いたが、一方では『百万塔陀羅尼』という現存する世界最古の印刷物が所蔵されていることを教えてもらい、現物を目の当たりにして感激した。特に「陀羅尼」がいつしか豆本のルーツであると考えようになり、ささやかながら私の豆本収集を始める切掛けともなった。何時だったか薬師寺から唐招提寺へ歩いた際、とある骨董商で明治期に複製されたという「百万塔」1基と「陀羅尼」(相輪と六度)2巻を購入したのは間も無くであった。ちなみに「陀羅尼」は『無垢浄光経 陀羅尼摹本』と桐箱に墨書があり、中には唐辛子が2コ入っている。

また貴重書庫には帙のない書籍が多くあるとのことで、正式の帙ができるまで簡易帙の作成を西谷さんに教えてもらい、テープ状の材料等を購入。作成の上、背文字を下手な毛筆で書いたことも懐かしい。

「旧書庫へ行きましょう」と鍵を持たれた。南京錠？を開けて鍵を差し込んだままにして金具に掛けて中へ入る。その仕草が余りにもスムーズなのに思わず笑ったが、その後は私もそれに習ったものである。1階には中扉(防火用)があり、頑丈な鉄の引戸で重く、それを開ける時には両手に片足を梃子の応用にして開けられたのが、これまた可笑しく思い出される。そしてこの扉は必ず閉めることと付け加えられた。

旧書庫の3階には「蔵経書院文庫・日蔵既刊本、同未刊本」があることを教えてもらったが、のちにこれらに紙魚を発見し、夏の暑い時期に

移転や点検・駆除に騒動したものである。このことが切掛けになったのではないが、『事務分掌規程』に「書庫及び書窓開閉…」とあったように、鉄格子の窓外に鉄の開きが何箇所もあり、以前から晴天の日は通風のため朝夕開閉していたことも今では懐かしいことである。

書庫の2階・3階へは段差の高い階段があり、一気呵成に登ると息が切れるほどであったが、図書を2・3階へ運び込むために階段近くの床に四角の穴が開けられ、3階の天井から旧式の滑車で1階まで籠が下げられる。図書を入れて「エイヤコラ」と上げるのがこれまた重く額に汗をしたものである。当然ながら1階から乗るのは図書のみで、人間は上と下に分かれての図書運搬用であり、その時の声が今も聞こえるような気がする。

次いで『江戸期京都書肆出版書目録』の作成を思い立ったことである。法学部図書室でも知ってはいたが、新書庫で『慶長以来書買集覧』や『元禄太平記』等と出会って、京都が書商ひいては出版の発祥地であることを知り、先ずその出版状況を把握すること。それがいずれは庶民の読書傾向を知ることにつながるのではないかと考えて、個々の刊本をカード化しようと思ったことである。折々にまた学内外で出版された図書目録を借りて帰り、家での作業がほとんどであったが、カード目録の配列は屋号を主類とし、名前を主綱、更に要目を年代順にして約15,000枚のものができた。これらは最近まで目的を達することなくわが家の押し入れで眠っていたが、この度落ち着く先を得て心から喜んでいる次第である。

おわりに書庫は多くの図書館職員が汗した、奮闘の歴史的集約の跡である。そしてそれは活用の一つの源でありまた兵どもが夢の跡でもありとしみじみ思うのである。

図書館の思い出は多くの人が持っており、またその人達は図書館外史とでも言うべきものも

持っていて、それらは枚挙にいとまがない。いずれにしても、ある時代を歩みそれを語る人は少なくなってゆく。附属図書館創立100周年

記念のこの時期に、『静脩』の臨時増刊号が出されることを心から祝福して終わりとしたい。

(ふるはら まさお：元教養部図書館整理掛長  
元武庫川女子大学附属図書館図書課長)

## 昭和20年代の図書館

河本 芳子

### 1. 古典籍の整理

本館の古典籍は概ね公家の歴代伝襲の蔵書や、個人の収書、所謂特殊文庫の中に含まれている。これらの文庫の内容や価値は『京都大学附属図書館六十年史』に詳述されている。私が多少なりとも整理に関与した清家文庫は前者で、谷村文庫は後者である。

清家本は殆どが写本である。写本は書写年や筆者、それも自筆か他筆かの判断が難しい。奥書や料紙その他から決め手が得られなければ推定が不明になってしまう。清家本の貴重書を整理中、突然、伊藤祐昭さん(注1)が「清原宣賢の字は判った。クキクキツとした字だ」と言われた。クキクキツと言われてもどんな字が判らない。見るとなるほどそれしか言いようのないピッタリの表現であった。いくつかの宣賢筆と思われる本を比較して得られた直感である。他の条件と矛盾しなければ直感も判断の一助となる。また署名があってもそれは筆者でなく、その本の所持者を示すものだったこともある。

書写年が干支のみで書かれている場合は、年表を見てその干支に該当する年を求めねばならない。奥書も元となった前の写本のものでそのまま転写される場合もあり要注意である。

古写本の整理は難行苦行であるが、時には副産物もある。清家本には清原家の家学を宮中で御進講した際の原稿本があるが、その注釈の部分は口語で、仮名は片仮名が用いられている。これによって、当時室町期の口語や片仮名の字体(例えばマは現在のマ)などが分かって興味を引くこともあった。

清家文庫の貴重書が写本であるのに対し、谷村文庫の貴重書は古版本である。谷村文庫は先

に貴重書が的屋勝さん(注2)によって整理された。その目録カードを見ると綿密、整然と記されているのに感服する。たとえば一行 字、  
行の如く、我が国古版本を類別するのに必要な字数、行数が克明に記されている。

宋版は整っていて美しいと言われているが、それだけでは具体的にはわからない。一見に如かず、見てはじめて会得できる。

漢籍を整理する際には、序文を読んで理解することも大切なので、漢文が読めなくてはならない。そこで人文研の鈴木隆一さん(注3)や文学部の竺沙雅章先生にご指導を仰いだ事もあった。

古典籍の整理には書誌学の知識が必要であることは勿論であるが、写本、版本を問わず古書に数多く接して実物を見る経験を積むことが大切である。

### 2. 和漢書目録規則

京大図書館では、法・経・文の三学部の図書は、本館の受入図書原簿には登録するが、本館へ本を運ばずに学部図書室で整理し、作成した目録カードのみが本館へ送付されていた。これに対して他の部局図書は本館へ運ばれ本館で目録カード作成後に部局へ返還された。本館で作成したカードはすべて法・経・文のカードと共に、本館内の全学総合目録に繰込まれる。

情報社会の進展に伴い出版物が多量となり、大学でも図書が急増した。これを従来的人员で処理するのは容易でなく、整理の遅延を余儀なくされ、最終的には本の利用が遅れることになる。二、三の部局図書室から本の利用を早くするため、法・経・文同様に図書整理を行いたいとの希望が出された。本館で検討の後、中央図